

全国発芽マップ 2002

～全国発芽マップの歴史とスモールプロジェクトへのシフト～

中西 英（宮崎大学教育文化学部附属小学校）
井柳 強（静岡県清水市 社会教育活動 地球クラブ）
濱崎 かおり（宮崎県北諸県郡三股町立三股西小学校）
中山 迅（宮崎大学教育文化学部）

1．はじめに

全国発芽マップは、1995 年（平成 7 年）の 4 月に 100 校プロジェクトの企画の一つとして参加校 11 校で始められた、インターネットを活用した栽培学習である。この企画は、新 100 校プロジェクト、E スクエアプロジェクトに引き継がれて、今に至っている。この企画での約束事は、同日、同時刻に一齐に全国で同一の植物の種子を蒔いて栽培するということだけである。参加校は、その成長の様子や児童・生徒の活動を電子メールやホームページ、さらには電子掲示板等で情報交換する。さらに、データをまとめて発表するなどの交流を図る。このようにインターネットを活用する協働的な学びの場が全国発芽マップである。

2001 年度から「児童・生徒の直接対話を通じた協働学習」「全国 200 校を超える参加校の増加による活動の沈滞化」「共通して栽培する植物の多様な希望」という理由から、栽培する植物を 1 つに限らず、参加校からの提案でスモールプロジェクトを立ち上げることができるようになった。それに伴って各プロジェクトごとに電子掲示板とメーリングリスト（以下 ML）を立ち上げることができるようになった。

今回は、全国発芽マップのこれまでの経緯と 2002 年度の特徴的な取り組みを取り上げ、インターネットを活用した協働学習の成果と課題について検討する。

2．2002 年度の活動の特徴

全国発芽マップには、「すべての活動を参加者がつくっていく」という文化がある。つまり、児童・生徒と教師の能動的なかわりが大切にされる。また、この企画には、栽培する植物などの「自然」そのものから、あるいは、インターネットを通して接する「人々」から直接学ぶことが重視されるという特徴がある。2002 年度も 4 月中にこのことを全国の参加校に確認するとともに、参加校からのスモールプロジェクトの提案を募った。

2002 年度は「ケナフルームへようこそ!」「Communication through pictures.」「大豆プロジェクト」「ひまわりプロジェクト(太陽の子)」「ビートプロジェクト【スウィート大作戦】」「さとうきびプロジェクト」「ケナフ・葉っぱ調査隊」「ケナフクラフトバザール」「ケナフの高さコンテスト!」「ケナフでクッキング!」のスモールプロジェクトが参加校から提案された。それぞれのプロジェクトのリーダーが種子の手配及び参加校への送付、活動の工夫や促進等を中心になって行ってきた。

全国発芽マップ全体の ML の活用数は年々減少してきている。しかし、電子掲示板への総発言数は、昨年度が 1917 件であるのに対して、2002 年度は 2003 年 1 月末の時点で 4754 件を超えている。また、ML や電子掲示板、TV 会議だけでの交流だけでなく、直接交流（face to face）に発展していったスモールプロジェクトも現れた。

3．小さな公民館から全国発芽マップに、そして世界へ

全国発芽マップは、学校だけでなく、「地球クラブ」のように地域の小学生を対象にした土曜休日利用のクラブ活動からの参加も認めた。この掲示板に外国の子どもたちと、画像でコミュニケーションしながら、植物の国際協同栽培をする部屋が新設された。これが Communication through pictures. の部屋である。

本年度の「地球クラブ」活動には、清水市内の小学校から 23 名が参加、「あなたのすてきな絵を世界中のともだちに!」をテーマに月 2 回、土曜日の午前中に活動した。公民館のロビーに設置された 1 台のオンラインパソコンを仲よく使って楽しい国際交流をした。「地球クラブ」のメンバーと同じように、英語の学習をまだ始めているベルギー、ポルトガルの小学生とジャガイモの協働栽培をした。播種、成長、開花、収穫、料理、収穫感謝祭などの様子を、画像でレポートしあった。3 カ国の指導者間に言葉 英語 の壁があったが、掲示板、E メール、チャットで相談し合い子どもたちの活動を支援した。参加した子どもたちは「言葉が通じなかったが、絵の交換を通して心を伝え合うことができた。」「インターネットを使って、世界の友だちと助け合いができた。」「言葉を自由に使えるようになれば、もっといろいろなことができるようになる。」と言葉の大切さを感じ取り変っていった。言葉を使わないで、画像交換をしながら進める植物の国際協同栽培は小学校低学年にも導入可能である。

全国発芽マップは、インターネットという仮想空間に、植物栽培という実体験を取り入れることによって子どもたちの興味をひきつけた。発表では小学校1,2年生のこどもたちが外国の友だちに画像でコミュニケーションするとはどんなことなのかレポートする。



4．大豆プロジェクト

大豆プロジェクトは2002年度のスモールプロジェクトの1つとして立ち上げられた。このプロジェクトには、15校の参加校が、大豆を通した様々な活動や参加校間の交流を目的として取り組んだ。

大豆を選んだ理由として「ここ数年、大豆のよさが見直され、さまざまな場面で話題となっていること」「大豆をつかった献立や、大豆製品が学校給食でもほとんど毎日のように取り扱われていて児童・生徒にとって身近であるということ」「地域によって育てやすいように品種改良がなされ、さまざまな品種が出回っているということ」が挙げられる。

種子の提供について、農林水産省生産局農業振興課に問い合わせたところ「南北に長い日本列島の地形から一つの品種では、同日同時刻の種蒔きは不可能である」との回答を得た。そこで、地域を大きく3つに分け、各地域の農業研究センターへ協力依頼を行い、異なる品種の種蒔きを行うことにした。

- 北海道・東北地方・・・トヨムスメ（北海道農業研究センター）
- 関東・近畿・中国・四国地方・・・タマホマレ（近畿・中国四国農業研究センター）
- 九州地方・・・フクユタカ（九州・沖縄農業研究センター）

種子を参加校に送る段階で、児童に対して、大豆や大豆製品、そして参加校のある所在地についての簡単なオリエンテーションを行った。大豆や大豆製品については、日頃身近なところに豊富にありながら、気がついていない物や意外な物に出会って驚く児童が多数みられた。また、参加校について日本地図で確認しながら大豆の発送準備をすることで、興味・関心の高まりが見られ、共に育て合うという協働の意識が生まれた。また、種子が届いた参加校からのメッセージが、手紙やメール、掲示板への書き込みによって届けられ、今後の活動への意欲がより一層高まった。一斉種蒔き後の交流としては、掲示板の書き込みが中心となっていったが、虫の被害や、天候による成長不良など大豆の様子を報告し合ったり、対処方法などについて教え合ったりした。残念ながら大豆の成長が思わしくなかった参加校には、別の参加校から収穫後の大豆を送り、そのお礼として大豆を使ったポン菓子を送るなど、大豆を通した間接的交流がなされた。これらのことが、遠く離れたところで生活している児童・生徒の心をつなぐことに結びついたと感じている。

土やその他の要因で思うような大豆の成長がみられなかった参加校も多かった。そこで、同一都道府県の2つの参加校で話し合い、大豆の株分けをすることになった。宮崎大学教育文化学部附属小学校と宮崎県北諸県郡三股町立三股西小学校は、自家用車で1時間半ほどの距離にある。成長の思わしくなかった宮崎大学附属小学校の畑に、三股西小学校の大豆を移植することになった。宮崎大学附属小学校の児童が、バス・電車を乗り継いで三股西小学校へ来校し、大豆の移植作業の他、交流会も行った。この交流会の中で両校の児童がお互いに大豆についての思いについて話した。直接顔を合わせる時間は短いものだったが、交流会前後の掲示板の書き込みが急増したこと、個人的にメールのやりとりをする児童がいたことを考えると、直接的交流の意義深さを感じる。



5．おわりに

2001年度に生まれた「スモールプロジェクト」の芽は、2002年度には大きな幹となった。そこには、ケナフ・ヒマワリ・ビート・サトウキビ・大豆といった多様な植物の協働栽培、それらを通じた国際交流・学校間交流・加工品の交換、そして人々の直接交流がある。これらを推進したのは、教師と子どもたちによる創造的で主体的な提案、相互の信頼、そして行動である。Eスクエアの「広がる仕組み」は、全国発芽マップの教師と子どもたちの中に生きている。